

令和 6 年度 第 2 回豊田市文化芸術振興委員会 会議録

○日時

令和 6 年 10 月 21 日（月） 午後 3 時 30 分～午後 5 時

○場所

教育委員会会議室（豊田市役所東庁舎 6 階）

○出席者

（委員）※敬称略

- ・高北幸矢（委員長）、高橋秀治（副委員長）、藤田雅也、石黒秀和、伊丹靖夫、磯村美沙希、石川紀子、中佳子

（関係課）

- ・スポーツ振興課 | 太田主幹
- ・博物館 | 高橋副館長
- ・美術館 | 田境副館長

（事務局）

- ・生涯活躍部 | 曾我副部長
- ・文化振興課 | 相田課長、藤野副課長、西村担当長、志村主査

○傍聴者

1 名

○要旨

曾我副部長あいさつ

今回は「第 3 次豊田市文化芸術振興計画の策定について」議題が一つである。委員の皆様から忌憚ない意見を伺いたい。市内で開催される様々なイベントのチラシを配布させていただいた。11 月にはラリージャパンも開催される。鑑賞・観戦いただければと思う。

議題 1

第 3 次豊田市文化芸術振興計画の策定について【資料 1】

事務局

- ・第 1 回委員会で委員の皆様から意見のあったとおり、計画の骨格となる基本理念やめざす姿を大幅に変える必要はないと考えているが、第 3 次計画において加えるべき視点、今後 10 年で注力すべき視点について、ご議論いただきたい。
- ・例えば第 2 次豊田市文化芸術振興計画改訂版以後に策定された、国の「文化芸術推進基本計画」や、県の「あいち文化芸術振興計画」では、障がいのある人のアートや、多文化共生についても触れられている。そういった視点も盛り込む必要があるかもご意見いただきたい。

委員

- ・民芸館の利用者数が伸びた要因を教えてほしい。
- ・利用者数等がコロナ前の数値にだんだんと戻ってきているのは、文化活動に魅力があるからだと思う。そういった取り組みが少しずつ広がっていくことが大切。
- ・座談会を実施し、様々な実践者の方から意見を聞けていてよい。貴重な情報や意見が詰まった資料である。こういった実践者の生の声を、たくさんの市民の方に知ってもらう機会があるとよい。
- ・座談会の話題の中で、子どもが自由に表現できる機会が保障されることが大切といった意見がある。こういった意見は、豊田市の未来を考える上で大切だと思う。
- ・成果を測る指標の再確認や、質的な結果を検討することは非常に大切である。可能であれば、研修会の講師に豊田市が実施してきたアンケートの質的な分析方法を教えてもらい、そういった視点が計画に上手く反映できるとよい。
- ・障がい者や外国籍の方との共生について、教育現場でもよく耳にする。この計画をきっかけに文化芸術がどうやって積極的に関わるかについて、今後議論を深めていければと思う。

事務局

- ・民芸館の来場数については、2021 年度までは展覧会のチケット購入者のみをカウントしていたが、2022 年度からは展覧会以外の来場者もカウントするように変更している。それでも近年、展覧会の来場者自体も増えてきている。また、以前は民芸好きには高齢者が多かったが、最近は若い人の関心が高まっていると感じる。民芸は多様なものを肯定するものであり、今の若者に響くところがあるのではないかと考える。

委員

- ・コロナ禍の問題について、利用者数がコロナ前に戻ってきているとは言われるけど、戻るのか戻らないのかまだ判断できないと考えている。2024 年の秋から文化イベント等の開催数は大きく戻るのではないか。この半年がポイントだろう。

委員

- ・文化芸術をどう評価するかについて、答えを出すことは難しいが、本質を捉えた評価をしていかなければいけない。ここをどうしていくかを、研修会の講師のような専門家にアドバイスをもらいながら、しっかりと作る必要がある。評価方法をしっかり作れば、豊田市において文化芸術が発展しているかどうかを測れるのではないか。
- ・文化芸術をどう捉えるかについては、障がい者や外国籍の方の視点がこれまで足りていなかったと思う。子どもたちや高齢者などを含め社会的に弱い立場にいる人に対して、アートがどういった力を発揮するか等を踏まえ、どうアプローチしていくのかという視点は確かに抜けているため、計画骨子の考え方に加える必要があると思う。

委員

- ・市民が展示会などで文化施設を使いやすいよう、稼働率を上げていく努力が必要ではないか。
- ・計画でいう文化芸術とは何か。例えば、子どもの絵画ワークショップなどに来た

親に何を文化芸術と思うかアンケートを取ったらどうか。

- ・子どもに自由に絵を描かせることができる親がどのくらいいるか。市民も育たないといけない。

委員

- ・音楽活動については、コロナを機に解散したグループや活動を停止したグループ、コロナ後に新グループを立ち上げたなどさまざまである。施設利用者数が伸びてきているのは、市民の方の音楽愛に寄るところが大きいと感じる。コロナ禍では、施設の減免補助があって助かったが、コロナ後に補助がぱったりと無くなってしまった。コロナ後にすぐ本格活動は難しいので、別の形でも、何か後押しとなる補助があればよかった。

委員

- ・親子で演劇や芸術鑑賞を行う団体に所属しているが、市民の文化活動については、サークル単位ではなく個人単位で参加する人が以前よりも増えている。文化団体の数字を見ると、団体数は減っているが、個人会員数は横ばいである。団体に所属して文化活動を行うことに抵抗感がある人やハードルを感じる人が増えているのではないか。指標に載りにくい活動が増えていると感じる。
- ・近年、以前のようにジャンル分けできず、文化芸術として括りにくいもの、一見文化芸術活動に見えないけどアートと言えるものも増えている。どこまでを文化芸術活動に含めるかと先ほども話題に出たが、こういった部分も拾えると計画の作り方や成果の測り方も変わってくるのではないか。

委員

- ・文化芸術の領域の判断は確かに難しい。社会構成が変わることで文化芸術も変わらないといけない。技術革新によって表現方法が変わる時代。アナログとデジタルの関係に代表されるが、新しい領域が拡大される一方で、何かが消えていく。
- ・人口減少が引き起こす文化の衰退は歴史的にはっきりしている。東京にはアーティストだけでなく、鑑賞者も沢山いる。同じ状況を豊田市に当てはめることはできないが、それで諦めてしまってよいのかというところもある。障がい者や外国籍の方にアプローチしていくと、新しい領域となり文化芸術が盛り上がる可能性はある。

委員

- ・少子化、過疎化は豊田市でも確実に起こっている。特に伝統文化の分野においては、高齢化により引き継ぐ人が確実に減っているといえる。領域はいろんなジャンルに広がっているが、特に伝統文化は弱くなっている。手厚く行うのか、取捨選択していくのか考える必要がある。
- ・2024年4月に開館した博物館の数値（利用人数等）を今後拾っていったほしい。

委員

- ・民芸館から若い人が出てくるのを目にする。民芸館の利用者はこういった世代が多いのか。

事務局

- ・日本民芸館に話を聞いたことがあるが、コロナ禍くらいから利用者に若い層が増えてきたと感じると話していた。今の民芸愛好家の高齢者層よりも多くなるかは

わからないが、民芸が世代を超えて継続して愛好されていると言える。

委員

- ・今日は民芸がひとつのキーワードになっている。名古屋市美術館でも民芸の展示が行われる。一種のブームと言えるかもしれない。若い世代に向けた民芸のテレビ番組も配信されている。民芸が 100 年経って、その成果がじわっと広がってきたのではないか。
- ・社会システムを考えると民芸はどんどん消えていく芸術。そこが他の芸術と違うところであり、魅力かもしれない。

委員

- ・今日は民芸館がひとつのポイントになった。評価について考える際に、数字を求めて評価の基準を作ることはもちろん必要なこと。ただ、民芸館は日本全体でも 10 館ほどしかなく、その一つが豊田市にある。来館者数はそれほど多くはないし、市民にも知らない人が多いかと思うが、民芸館があることが豊田市の文化度を高めていることになっている。文化芸術を評価するときに、美術館や博物館などの華やかな施設の利用者数を測るのは当然必要であるが、民芸館のような小さくとも価値のある施設をきちんと維持し、そこに訪れる人々が徐々に増えていくような街であることに、今後豊田市が進むべきポイントがあると感じる。これまでは自治体の財政力で華やかだという印象があったが、豊田市政 70 年が経ち成熟を考えたときに、民芸館のような取組をどう評価していくかが一つのポイントなり、この視点がこれからの豊田市の文化芸術を考える際に重要になると感じる。

報告

部活動の地域移行について

事務連絡

事務局：次回開催は令和 7 年 2 月頃を予定。

以上